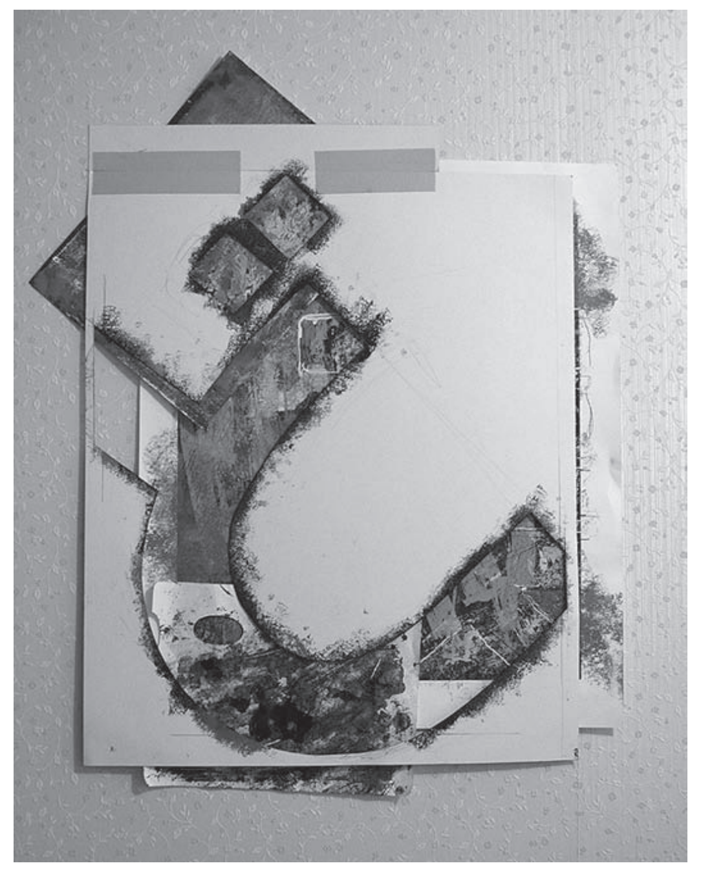
分枝 *branching*

http://branching.jp
branching 02
publish : 9.September.2012

「文字」シリーズ

Akio UMEDA 1957~
梅田明雄



幼少の頃より「字がきたな〜い！」とか「下手な字ぃ」などと数限りなく言われ続けてきた。
文字は人に何かを伝えるため、当然他人の目にさらされるのだが。
自分の書いた字を他人に見られるのが、とてつもなく大きなプレッシャーになってしまった。
結婚式の披露宴の受付などで署名するようなときには、ホント、顔から火が出る思いだ。
美人の受付嬢などいた日にゃあ、さらなり！
達筆の輩を見るといつもうらやましく思う。
近年　パソコン等使うようになったので、肉筆を人前にさらすことは少なくなって少々気分は楽になった。
しかしながらこのままではシャクなので自分なりに文字をこんな風に表現してみた。
「梅田さんの文字ってステキ！」などとどなたかおっしゃってくれないかと淡い期待をいだきつつ！

---

h24.8.6　飯綱高原にて　私の文字高地回遊中

日本のアウトサイダーアートの消失点 vol.02
『Libido 鹿児島』に見る共振する衝動と拡がり

Kazutaka MUSYA 1982~
ムシャ カズタカ

『障害学研究 8』(障害学研究編集委員会、明石書店、2012.06) で発表された『障害と芸術の「共犯性」』(長津 ,2012) では、現在進行形の「障害者の芸術」について簡単な総括をしながら、物としての「作品」に注目が集まる中、時間や空間を共有する中で生まれる関係性を共同性という支援者／被支援者の限られたものから、共犯性というより広い視点を導入することで、多様な人が参加しうる「芸術」というものが提起されました。現場主義や当事者主体という価値観の中で、実は死角になっているものそれこそが実は「障害」やマイノリティであるゆえの属性であり、支援／被支援という権力関係の中で、障害もそうだと言うだけで、それは肯定されてしまったりする危険性があります。しかし、この「狂犯性」というテーゼは—その言葉そのものを間違って受け取られたくはないけれど—ぼく自身は賛成だし積極的に評価もしていきたいと思っています。共同性という柔らかなベールのような飽和力のあるダイナミズムから、狂犯性という「わたし」という固有性同士が響きあう相互作用のかたちの中にある希望が見えた気がします。
ここ数年、ぼく自身が考えている「媒体化する支援」というテーマがあります。例えば「障害者のアート」を含む多くのマイノリティによる自己表現は、その表現が社会や市場に繋ったときには狭義の「支援者」の姿が少なからずあります。障害者のアート、ときに「日本のアール・ブリュット」と呼ばれる作品にさえ制作する作家の多くは福祉施設や病院でのケアやセラピーを受けています。しかし、それは決して作家の主体性を否定するものではありません。むしろその活動を積極的に評価し環境を整え作家個人と社会との接点として展示会やデザイン化し商品を生み出すことも施設や支援者が中心にある種、戦略的に担っている人間がその表現を社会的な「アート」に推している事実があります。そのとき支援者は、作家個人との支援者という個別の関係性だけではなく、社会との接点であったり代弁者・翻訳者のような位置にもいます。また、それに伴い直接的にある社会の、例えば障害者の自己表現を「アート」という軸で捉えていこうというコミュニティやネットワークなどの評価や価値観を、支援者自身の「支援すべき作家」個人に対する振る舞いとして伝え影響を及ぼします。
先に紹介した「共犯性」とは、作家・広義の支援者・観客それぞれが意図的に既存の価値観や境界線を脅かすように共同しあう、関係性が伴った文化活動の構造のことです。そして、ぼくの考える「媒体化する支援」とは、その内側にある関係性そのものを「起こす」支援者の態度や考え方,実践のことなのです。さてこのテキストのタイトルにある「日本のアウトサイダーアートの消失点」の向こう側にあるものこそ、作家を支援する支援者や場・環境・施設が「メディア」のように互いに作家や作品を映し反射し合い広がるネットワークです。次回以降、その共犯と共振のネットワークの結実とも言える展示会や企画とその内側で起こっていることも紹介できたらと考えています。

障害者アートとしてのドラムサークル

Tomohiro SHIOTSU 1965~
塩津知広

誰にとっても『”自分自身で在る”＝”自分を表現する”』ということは生きていく上で不可欠であると思っています。
生きるということそのものが”アート活動”でありこの世に息づく人々はみな”アーティスト”であるとも言えるのではないでしょうか。
”自分を外に向かって表現する＝アート（芸術）”は、エンパワーメント（自分らしく生き生きと生きるチカラ）を高めていくためにとても大切なツールです。

われわれが常日頃に（それとは意識せずとも）使っている表情や仕草や言葉、これらは”自己表現活動＝アート（やコミュニケーション）”に欠かせない手段です。
しかし、それらの行動が苦手な障害者の方々にとっては、自分を表現するためにこれらの手段に代わるものが必要です。
ドラムサークルは、その表現活動のひとつとして、障害者支援現場より注目していただいています。

”芸術（アート）”として代表的なものは、絵だったり造形だったりします。つまりカタチに残るモノ、目に見えるモノ、そのままそこに在り続けるモノ。
しかし瞬間的にその場に現れる音の響きや体の動き、いま見た（感じた）けれど次の瞬間にはもう居なくなってしまうキラメキ、それも”アート（芸術）”と捉えられるのではないでしょうか。

具体的には、個々人の笑顔であったり歓声であったり喜びのあまり止まらない動きであったり、その場のエネルギーの高まりであったりみなで創っている居心地のいい空間であったり、発現の仕方はさまざまです。
われわれが不自由なくできること（表情や仕草や言葉など）がままならないだけにあらゆる手段でキモチを外に向けてしようとする行為、限られた自由になる（カラダの）部分を精一杯使っての行動、それは時にわれわれ（あえて「障害者」と分けるなら）健常者を思わずのけぞらせるほどのチカラをもって目前に現れます。
その様子を見た（日ごろ傍に居る）支援者は、口をそろえて「こんなことができるなんて思っても見なかった、驚いた」との感想を事後に語ります。予想を超えて感動をもたらす事象は、まさしく”アート（芸術）”です。

こういうアートに触れ、感じ、その気持ちの高まりを共有する。それには、その場に参加していただくのが一番いいのは当然です。ですが、アート作品として残すために「なんとかできないだろうか？」と思い悩んでいるここ最近です。
動画？写真？どういうカタチがいいだろうか？これからチャレンジしてみたいテーマとなっています（これをお読みいただいたみなさまより、よろしければアドバイスいただけましたら幸いです）。

拙文、駄文、お読みいただきありがとうございました。

呼吸

Masato YAMAMOTO 1977~
山本正人

時々、隣のベッドから長男の声が聞こえる。
それは、嫌な夢を見ているのか、おしりの気持ち悪さからか、お腹が減ったからか。
不安になって、その都度息子を見にいく。
生まれて一月も経たない赤子の挙動は、私にとって大きな心配事の１つ。

妻は、何事もなかったように、寝入っている。
落ち着かずに妻を揺すり起こすと、「大丈夫だよ」と一蹴。

私は息子の胸に軽く手を当て、寝顔に耳を近づけて呼吸を確認する。
寝息を聞くことで、安心する。

上の娘２人が生まれた時も、
同じようにしていた自分を思い出す。

そういえば、私が小さい頃、
死ということに恐怖を感じて寝付けないことがあった。
幼い私が「死ぬとどうなるの？」と聞くと、母は「心配しないで寝なさい」とだけ。
不安で仕方なかったが、母に寄り添っているとそのうち眠りについていた。

我が子に同じことを聞かれたら、なんて答えよう。

私は今、人から人へのタスキリレーの真っ直中にいる。
私が生まれてきたのも、この為だったのかとさえ思う。
そのタスキはどこへ繋がっていくのか。
ゴールはあるのか。

一つ分かることは、目の前の子供達は私にとって守らなければならない存在。
子供達が、たくさん喜び、笑い、哀しみを経験し、さらに大きな感動を知ること。
そのために存在する。

今日も昼間、娘達は、
アイスクリームを取り合い、喧嘩していた。
その仲裁に入りながら、娘達の言葉、行動を噛み締める。
食べ終わる頃、
２歳の次女が「みんなで食べるとおいちーね」といった。
私は心から頷いた。

branching 02 contributor

安達浩平 Kohei ADACHI
1979 年山形県村山市生まれ 長野県長野市在住 自営業
2011 年 暮らしをたのしくする雑貨セレクトショップ　Roger/ ロジェ　雑貨小売事業開始
2012 年４月 善光寺門前店オープン
新事業フードビジネスにおけるアクティブコンサルタント開始
Kohey0806@nifty.com
ロジェ http://www.zakka-roger.biz

氏家啓雄 Yoshio Ujiie 1959~ 函館生まれ
東京在住
ujiie planning office 代表
アートディレクター
https://www.facebook.com/ujiie

梅田明雄 Akio UMEDA
1957 年愛知県豊田市生まれ 長野県千曲市在住
刷師 彫師
梅田版画工房主催 (リトグラフ)
長野県千曲市上山田 671-2
Tel:026-276-1316 Fax:026-276-1319
litho@u55.jp

小川志津子 SHIZUKO OGAWA 1973 生まれ
東京都在住 ライター業
shibe@mx1.nisiq.net
「あいにいく」http://www.ai-ni-iku.com

納和也 Kazuya OSAME
クリエイター 1971 年埼玉県熊谷市（旧妻沼町）生まれ
1980 年より長野県に転居 1990 年 STUDIO3 在籍
1994 年阿佐ヶ谷美術専門学校リビングデザイン科卒業
1998 年〜2010 年　株式会社デジタルアドベンチャー勤務
2011 年〜バエイカッケイ開発参加

OZ / 尾頭 / 山口佳祐 表現人 絵馬師
1986 年長野の山で生まれ育つ
原始循環思想を軸に独自の手法で表現し続ける
2001 年より即興性・場の特異性を LivePaint にて追求し続ける中、
2011 年には大絵馬を描き上げ長野県・武井神社へ奉納し、絵馬師として動き始める

川合朋郎 Tomoro Kawai / 1976~ 大阪生まれ
静岡県三島在住　画家
東京芸術大学卒
tomorokawai.com
トポステラソ 河合朋郎　2012 年 10 月 28 日（日）〜2013 年 2 月 3 日（日）
於：まちとしょテラソ
開館時間　9:00 – 20:00

北澤一伯 Kazunori KITAZAWA
1949 年長野県伊那市生れ 美術家
1971 年から作品発表。74 年〈台座を失なった後、台座のかわりを、何が、するのか〉彫刻制作。80 年より農村地形と〈場所〉論をテーマにインスタレーション「囲繞地（いにょうち）」制作。94 年以後、廃屋と旧家の内部を「こころの内部」に見立てて美術空間に変える『「丘」をめぐって』連作を現場制作。その他、彫刻制作の手法と理論による「脱構築」連作。2008 年 12 月、約 14 年間長野県安曇市穂高にある民家に住みながら、その家の内部を「こころ内部」の動きに従って改修することで、「こころの闇」をトランスフォームする『「丘」をめぐって』連作「残侠の家」の制作を終了した。韓国、スペイン、ドイツ、スウェ - デン、ポーランド、アメリカ、で開催された展覧会企画に参加。また、生家で体験した山林の境界や土地の権利をめぐる問題を、「境（さかい）論」として把握し、口伝と物質化を試みて、レコンキスタ（失地奪還／全てを失った場所で、もう一度たいせつなものをとりもどす・プロジェクトを持続しつつ、95 年 NIPAF’ 95 に参加したセルジ . ペイ（仏）のパフォーマンスから受けた印象を展開し、03 年より「セルジ . ペイ頌歌シリーズ 」を発表している。

北島由美 Yumi KITAJIMA
1961 年長野市生まれ リトミック講師
中学音楽教師 6 年勤務後退職 専業主婦業 10 年後リトミックを学ぶ
養成校卒業後リトミック研究センター長野第一支局をたちあげ
現在同支局チーフ指導スタッフ
pata24@mx2.avis.ne.jp
こどものためのリトミックながの http://kodomonotameno-r.com

木村仁 Hitoshi Kimura 1948~ 福岡生まれ
美術家 信州大学教授
Hitoshi Kimura Works on Web Site
まつしろ現代美術フェスティバル主催 http://mcaf.jp
アーティストレジデンス善光寺界隈主催 http://air-zenkouji.com

ごとうなみ Nami GOTO
1969 年生まれ　美術家
’ 91 年東京芸術専門学校入学 翌年中退し渡印
帰国後長野に拠点を構え’ 99 年より発表を開始
2012 年 gg ごとう画室を開く。長野美術専門学校講師。臨床美術士

塩津知広 Tomohiro SHIOTSU
音楽講師 1965 年福岡県北九州市門司区生まれ 長野県長野市在住
1990 〜音楽教室講師として活動開始
2006 年〜「ドラムサークルながの」発足
drumcirclenagano@gmail.com
URL ドラムサークルながの http://hey8tsedrums.com/dcngn/

島田浩美 Hiromi SHIMADA
1979 年飯綱町生まれ 長野市在住
編集・ライター
2002 年信州大学人文学部卒業
2003 年〜 2005 年間世界一周旅行、帰国後、地元出版社勤務を経て、2011 年元同僚と ch.books オープン
フリーペーパー『チャンネル』を隔月で発行
shimada@chan-nel.jp
http://chan-nel.jp/

たかはしびわ Biwa TAKAHASHI
画家 1972 年東京都生まれ　長野県在住
長野二紀会会員　日本ペンギン党党員
1997 武蔵野美術大学油絵学科卒業
2006.7 〜『週刊さくだいら』にて『さくだいら美術探訪』隔週連載
（2008 年 7 月から 4 週に一度の掲載）
2007 信濃毎日新聞短歌欄イラスト担当

中尾美穂 Miho Nakao 長野市生まれ
池田満寿夫美術館学芸員

西 達也 Tatsuya Nishi 1974~ グラフィックデザイナー
長野市戸隠生まれ／戸隠在住
東京の印刷会社、プロダクションを経て 2011 年帰郷
2012 年冬より独立兼 FlatFile スタッフ
nishi24tatsu@true.ocn.ne.jp

服部洋介　Yousuke Hattori
1976 年　愛知県生まれ　長野市在住
文学学士（歴史学）
yhattori@helen.ocn.ne.jp
http://www.facebook.com/yousuke.hattori.14

前田聡子 Satoko Maeda 1982~ 写真家
sakko0615@gmail.com
ドイナカ日記　http://sakko-do.jugem.jp
https://www.facebook.com/sakkodo
トポス高地回遊 前田聡子展
8/20~9/2 ギャラリーアンデルセン
9/2~9/17 エルム
9/18~9/30　ベッカライ麦星
http://toposnet.com
前田聡子写真展『さっこてん』
とき：2012 年 10 月３日〜 10 月 15 日
場所：小布施町立図書館まちとしょテラソ
http://machitoshoterrasow.com/
＊10 月 13 日（土）18 時からスライドショーとお話の会

町田哲也 Tetsuya MACHIDA
1958 年長野市生まれ バエイカッケイ開発統括 クマサプランニング主催
iam@machidatetsuya.com
http://tokisae.com/map

松下幸　Ko Matsushita(ペンネーム)
シンガポール在住
コピーライター　ライター

丸山玄太 Genta MARUYAMA
1982 年長野市生まれ 東京在住 クリエイター
undergarden 主催
genta@undergarden.com
http://undergarden.com

ムシャカズタカ Musha Kazutaka
福祉施設職員
障害者福祉施設で表現活動とサポートの仕事に就き、展示会や現場のプログラムづくりの中心を担う。障害のある方の表現活動の現場の表現と支援者関わりについての短い発表など研究中。
http://mshkz.tk

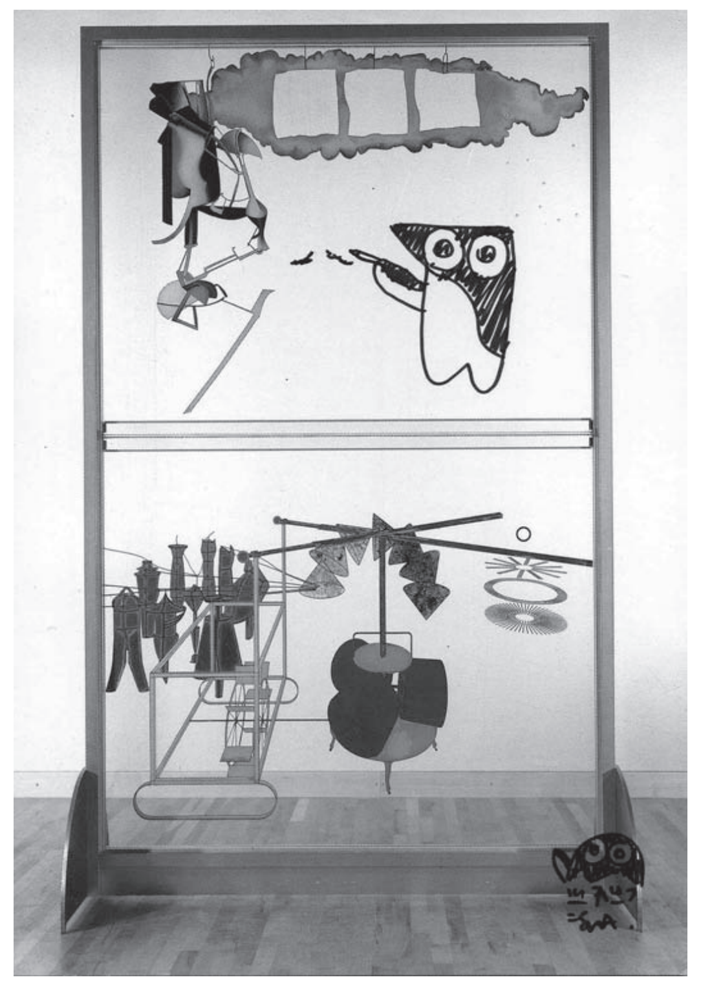
モリヤコウジ Koji Moriya 1974 年長野市生まれ
1998 年より NY にて 11 年滞在
2010 年長野市に FLATFILE を開設

山本正人 Masato Yamamoto 1977~
群馬大学教育学部卒　長野市在住　土木関連業務

パロディー本質論

Biwa TAKAHASHI 1972~
たかはしびわ

全人類を全ペン類に置き換へて戯画を描きし我なりて、パロディも又戯画の一種なれば、我も手を染めたり。
我思ふに、元となる作品を構成したる様々な要素のうち、一つ二つを変ふることによりてパロディは成立す。
時代、場所、天候、持物、動作、などを変へて描かば、パロディとなるらむ。
例へば、モネットの『日傘をさすをんな』に於いて、晴れたる天候を土砂降りに変ふれば即ちパロディたるを得。
抑々（そもそも）我がペンギン戯画もまた、全人類を全ペン類に置き換へたる時点で既にパロディ也。
プラトン曰く、芸術は現実の模倣也と。
しかし我は言ふ、何かを変ふればパロディと成るなれば、芸術は現実の何かを変へて表現したる故に、芸術は現実のパロディ也と。
三次元のものを二次元に変ふれば絵画なり、素材を変ふれば彫刻なり。
色を自由に変ふるを以て野獣派が生まれ、形を自由に変ふるを以てデフォルマシオンとなす。
美術史は、様々な形で芸術が現実の模倣から離れ、愈々（いよいよ）パロディの度合が進み来たることを証したる。
斯くの如きパロディ史観に基づかば、パロディとは即ち芸術の根幹にして本質也と言ふべからむ。
パロディは芸術の傍流にあらず、本流也。



デュシャンにひげを描く　油性ペン、ポストカード、2011 年制作

えっ？ 私が、ですか？

Hiromi SHIMADA 1979~
島田浩美

ある初夏のこと。権堂にあるライブハウス・小劇場のネオンホール代表でもあるカメラマンの清水さんと、朝から昼食も食べずに夕方までぶっ続けの取材をした帰り道だった。そんな究極の空腹時、突如、助手席の清水さんがこんな話を始めた。

「実は今年、ネオンホールがオープン 20 周年を迎えるんですよ。」
「そうなんですかー。おめでとうございます。」
「それで、記念公演として寺山修司の『邪宗門』を上演する予定なんですが、今日はそのミーティングがあるので、打ち合わせ場所の和光照明まで送ってもらって良いですか。」
和光照明といえば、代表の中沢清さんは、寺山氏率いる演劇実験室「天井桟敷」に在籍し、多数の海外公演も経験し、現在は「演劇実験室カフェシアター」を主宰する長野アングラ演劇界の重鎮！
「今回は中沢さんに演出をお願いしているんですよ。」
「そうなんですかー。」
「で、10 日間のロングラン公演をしようと計画していて。」
「すごいですねー。」
観劇はしたことがあれど、役者というのは私とは無縁の世界だな。そんなことを考えていると、清水さんがひと言。
「で、この演劇に島田さんも出てもらおうと思って。」
「えっ！」
この、演劇の「え」の字も出したことがない私が！？
「初耳ですけど。」
「今、初めて言いました。」
「いや、でも、私、演技とかしたことないですし……。」
「みんなで歌ったりする、楽しい演劇だから大丈夫ですよ」
「……（えっ！ 寺山修司の演劇なのに、楽しい……！？）」
「バンドマンとか、普段演劇したことがない人にも声をかけてますから。」
「いや、私、人前で歌ったり、ステージに立ったことすらないですから……。」
「台詞がない役の人も多いし、裏方も必要だから、そういった役になると思いますよ。」
若干の興味がない訳ではない。せっかくのチャンスだし、やってみようか。いや、しかし、私が演劇って……。自問自答をするも間もなく、和光照明に到着。しかし、結局は頼まれごとを嫌とは言えない性格と、好奇心旺盛の性格がうずき（こっちが主）、
「じゃ、ちょっとやってみようかと思います。」
そう答えてから、早３カ月。週一の稽古を重ね、私の配役は、さて……。11 月９日から 10 日間、ダブルキャストでお届けする『邪宗門』にて、新境地開拓なるか！？ 皆さま、乞うご期待を……？
(注：念歌って楽しい演劇という表現は少々語弊があることを、念のためお伝えしておきます……)

Monologue II

Genta MARUYAMA 1982~
丸山玄太

九月十七日

別れてしまいました、結局。

連絡を頂いた直後でしたので３週間ほど前です。

そうです、あちらから。

簡単に言ってしまえば、訳の分からないことで突然婚約を破棄された、という感じでしょうか。

他に言いようがありませんから。彼にしてもどうしようもなかった、と理解はしていますが。

はい。

あの日の朝から東京出張でしたので、駅まで送っていきました。

夜になってから、とりたてた用事はなかったのですが、どう？というようなメールを送りました。

いえ、翌朝になっても返信はなかったのですが、大学時代の友人と会うとも聞いていたので遅くまで飲んでいたのかな、程度にしか考えていませんでした。

その日の夜になって、翌日の迎えに行く都合もあったので電話をしました。その時にはもう消えていました、私。記憶というか、なんというか。電話口に出た彼は他人行儀で、まず自分の名字を名乗りました。

仕事先の相手と同席中かな、と思ったのですが、彼、お間違えではありませんか？と私に言ったのです。私が黙ってしまうと、重ねて、申し訳ないのですが、どなたですか？昨夜のメールからお間違えですよ。と。

不都合なタイミングでかけてしまったのか、むこうで何が起こっているのかまったくわからないまま、腹立たしさも少し混ざってとにかく明日迎えが必要なら時間をメールするように、ということだけ伝えて切ってしまいました。

あとで本人に聞いたところ、彼の携帯電話のメモリに当然私の番号は登録されていたのですが、誰かわからなかった。いつかどこかで少しだけ知り合った誰かが間違えているのではないか、と思っていたそうです。

翌日になっても連絡はありませんでした。ただ同棲していましたから、何れにしても帰ってはくるはずだとは思っていました。不安は少しですがありました。

帰ってきました。いつも通り、というか。私にとってはいつも通り、彼にとっては…どうだったのでしょう。彼、部屋で待っていた私を見てとても驚いていました。目を丸くして。それで…どなたですか。って。

ふざけている様子はなく、いたって真剣な問いかけに、今度は私が驚いてしまって。

暫く何の言葉も出てきませんでした。彼も私を見て固まったままで。
それはそうですよね、帰ったら彼女は不在で、見知らぬ女性が部屋にいた、と。泥棒、とは思わなかったそうですが、普通のことではないな、とは思ったそうです。

ようやく私が、どういうつもり？と尋ねました。その時は…怒ってはいませんでした。いえ、怒ってもいたかもしれません。何を思っていたとしても、私の目の前の彼は、すでに私の彼ではなかったのですよね。

申し訳ないけれどあなたが誰なのか分からない。どうして僕らの家にいるのですか。って。全く理解出来ませんでした。実際にあなたは私たちの家に帰ってきたじゃないの、って。それで分からないとはどういうことなのか、って。

暫く考えていましたが、やはりあなたを知りません、と。

彼女がいること、その彼女と婚約していること、週末には式場へ打ち合わせに行くことも説明しました。全部覚えているんです。その彼女が、目の前にいる私だということ以外。

私という人間だけが彼から消えてしまっていました。

分からない、と言っていました。名前も顔も出てこない、と。ただ仕草や声は私に似ているような感じはする、って。笑っちゃいますよね。

写真や色んなものを広げて。共通の友人にも電話しました。でも、結局、お互い、なんでしょうかね。彼も私も納得することは出来ませんでした。その時はまだ一時的なものだと思っていましたし、もしかしたら病気かもしれない、とも思っていたので、彼が、一人になりたいから、と持ち帰った荷物を再び持って出ていこうとしたときには一人には出来ない、と抵抗しましたが、最終的には彼がそれで落ち着くなら、と折れました。

彼をとりまく状況全てが、私との関係を証明していましたから、彼も自分がおかしくなってしまったことを理解したのだと思います。二人でデートをした場所をまわったり、友人を訪ねたりもしましたが何も変わりませんでした。もちろん病院へも行きました。

2ヶ月ほどでした。その後、婚約を白紙に戻したい、と彼から言われました。

納得したわけではないですが、そんな状況で結婚も出来ないですし、負担ならば今はひとつでも減らせれば、と。いつか思い出してくれると思っていました。たとえ思い出せなくてもその記憶の相手が私だということは変わりませんし、その私を今の私で埋めれば良いと、どこか楽観的になってもいました。彼自身は変わっていませんでしたから。

彼にとっては大きなことだったのでしょうね…もしかしたら私の方が変わってしまったのかもしれません。

いつまでも待つと、一緒にがんばるから、と食い下がりましたがどうしようもありませんでした。

あれは本当のことだったのですか。

そうですか。ただそのことをもっと早く知っていたら…いえ、知っていてもどうにもならなかったでしょうね。どうせなら私の記憶も消してくれたらよかったのに。

2009 年 10 月 岩手県花巻市東和町東春山八斗川原旧鯉養殖場
作品タイトル：八斗川原／記憶／道
旧鯉養殖場を洗浄。水を入れ替えた後、戦後のある時期まで土地の産物であった羊毛を置く。

場所の力 「地霊 ゲニウス・ロキ (Genius Loci)」

Kazunori KITAZAWA 1949~
北澤一伯

1990 年代前半より、私は私の心のために、「荒れはてた場所」を、美術のコードであらわすことのできる「かけがえのない場所」に変容させる仕事をしてきた。
私は、「荒れはてた場所」を、「荒れはてた私の心」と見立て、「かけがえのない場所」に変容させる仕事を成就させることで、心の問題を超克するという仮説を、自らに課してきたのである。
制作の志向性からいえば、どこかの地域の無名の土地が、私にふさわしい制作現場である。
しかし、そのような行為が正しいという確信があるわけではない。したがって、疑念は当然わきおこって負の思考に翻弄される事も多かった。
確かに、制作行為には過ちも含まれている。作業中、心の問題が塊のように、時には壁のように感じられて、現場に在った。その問題を突破していくプロセスに、心を再構築していくのに必要な美術の特質を含む力の働きがあると気づいたのは、制作計画変更後の修正実行の最中のことである。
それは表現について、私の考えを深め、負の感覚で作業をしている私の背中をふさわしい方向に後押ししてくれるような人の言動が、想定外に、しかも突然に、まさに共時性とでもいうべき意味を感じるタイミングで起きることに関わっている。
仕事中の私の前に、土地在住の古老が現れて、地域の歴史や地名の由来をひとしきり語って帰っていく体験もそのひとつだ。

例えば 10 年ほど前、バリ島北部の寒漁村で崩れた井戸を作品化する行為をおこなっている時のこと。村の老人が椰子の樹々の間から歩いてき近づいて、この井戸の水は、村人の産湯に使われたのだと身振りをまじえて話しかける。私が、『「わかった」』と感謝の言葉をそえて答えると、彼はにっと笑って椰子の林に帰っていく。老人の裸の背中から、「場所の力」としかいえないような、私に語りかけたくてウズウズしている憑き物の微妙な水蒸気がたっていると、私は感じる。そして、それ以後、井戸周辺の光景は貴重な祝誕の在り方を、私に見せはじめるのである。

なぜ、それぞれの土地で、そのように語りかける人がいるのか、私は疑問に思う。
謎ではあるけれど、おそらく「地霊　ゲニウス・ロキ（Genius Loci）」とは、このように人の身体に宿り憑依して言葉を発する「場所の力」の働きをいうのだと、私が考えている所以になっている。
さらに、そのような体験の積み重ねが、私に深い慰謝の感慨をもたらし、心の治癒になったことの不思議を想うのである。

『場所の力』（2002 年学芸出版社）の著者ロドレス・ハイデンは、「場所の力」について次のように述べている。

「場所の力 . それはごく普通の都市のランドスケープに秘められた力である . 共有された土地の中に共有された時間を封じ込み , 市民の社会的な記憶を育む力である .」

そして、訳者後藤春彦は、「彼女が言う社会的記憶とは、労働者の歴史であり、民族や女性の歴史を意味する。特に地域社会における悲痛な体験や敗北した闘争の歴史を含むものである。これらは、書物に記されたり、公園や広場の銅像となって表徴される、強者や勝者、すなわちメジャーの歴史とは明らかに異なるもので、人々の口伝や街角の何気ない景観などによってのみ伝えられる市井の人々のアイデンティティとも言えるものだろう。」というメッセージを、本書の冒頭に寄稿している。

土地の言霊。「地霊　ゲニウス・ロキ（Genius Loci）」の声。それこそ私に「死」の側を選ばせることを拒否し、生きる側に立たせ制作を持続させる力であると、私は感じる。
場所の力。
例えば、地方都市と集落に、そのふたつの間を貫通する広域農道の周辺の建造物に、貧しい山岳の村に、廃墟に、新興のチープなプレハブ建築に、「風土」と「土着性」というサイトスペシフィックを観ようとする者にむかって出現する何か。
さらに、観ようとする眼差しを否定してくる本質的にヴァナキュラーな何か。
つまり、日本の 2011 年３月 11 日以後の被災地の、土砂で埋められた場所にも、津波の剥奪から取り残された土地にも、さらには放射性物質に汚染された海にも土壌にも、秘められて横たわっている一筋縄ではいかない力のことである。

雑談

Koji MORIYA 1974~
モリヤコウジ

モリヤコジ (FLATFIILE) X 西達也

モリヤコウジ（以下 M）もう事務所の名前は決まっているの？
西達也（以下 2）なんとなく。こんなのはどう？（候補の一つを見せてくれる）

M　ちょっと堅くない？デザイン事務所って感じがしないような。。
2　そうね。まあ、デザインに限らず、色々な分野で活動していくためにはデザインって言葉を使わないほうが動きやすかったりするしね。ていうか、flatfile ってどういう意味なの？「ふらっと　入る」ってこと？

M　flatfile＝ふらっと入る。う〜ん、それはちょっと苦しいな〜。何人かには聞かれた事があるけど。flatfile はマップケースのこと（地図等大きめの紙媒体のものを収納できる棚。アメリカではそう呼んでいる。）基本平面作品を扱うギャラリーにしたかった。flatfile に作品を収蔵してお客様が観覧可能で、気に入ったものがあれば購入できるシステム。
2　そして、それを額装してもらう。と。

M　そうそう。額縁が本業なので。元々紙に描かれた作品がとても好きだったし、かさ張らなくていいね。キャンパスや立体作品は収納が大変。アートは出し尽くされて常に新しいモノが期待されてるけど、一枚の白い紙に無限の可能性が詰まっているよね。
2　へ〜。それはそうと併設されるカフェの名前は「flatcafe」ってのはどう？

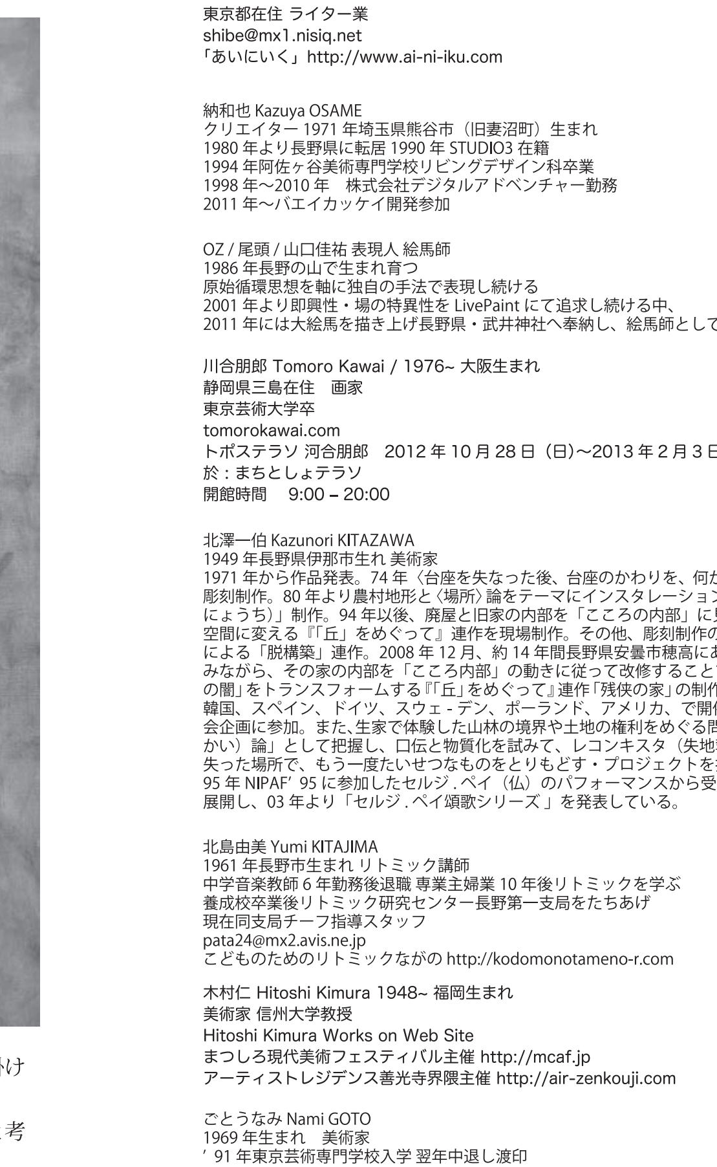
M　いいかも。ロゴと店番よろしく。(flatfileのロゴは西達也によるもの)
2　デザイン業をやりつつ、店番するよ。物販スペースももっと充実したいね。

M　アートスペース FLATFILE はギャラリースペースがあり、TOPOS SHOP があり、カフェあり、デザイン事務所あり、フレームショップあり、狭いけど楽しみだね。
2　だね。なんか入りづらい店だったけどもっとたくさんの人に来て欲しいね。

M　気軽にふらっと入れるのが理想ね。

水浴図

Tomoro KAWAI 1976~
川合朋郎



自然／風土／信仰／伝承などの人智を超えた物事には長い時間を掛けて向き合いたい。私もそのうちの一つである。
性急な理解よりも曖昧なまま漠然とした状態を眺める事が大切だと考える。
ほのかな光／音／臭いなど、気候風土を受け入れた中から生まれる文化はどれも魅力がある。
大都会の強烈な光、音、臭いはそれらを影に葬り去る。
何かを生み出そうとしないこと。全ては既にあるのだから。殆どは知覚できないもの。遠くから近くから目を凝らし耳を澄ませ静かに思いを馳せる。
夏。地表には直径 1.5 センチほどの穴が無数に空いている。地中で暮らしていた蝉の幼虫が地表に這い出た跡である。それらは夜空の星々と呼応して同じ並びをしている。

10 月カフェスペース open
11 月「ピノッキオの床」町田哲也
12 月ブランチング vol.3 配布イベント
＊詳細は http://flatfile.jp にて

組織と人

Kohei ADACHI 1979~
安達浩平

今夏、仕事を通してたくさんの人に出会った。反省と達成感が入り混じる中、組織と人の関係はとても難しいものだと実感した。
【人材】【人財】【人在】【人罪】
数年前からだろうか、コンサルティング系の会社がよく使う言葉である。もちろん決まり文句は「【人材】から【人財】への育成。」だ。
そして【人在】と【人罪】は排除するという考え方がセットになっているようだ。
しかし、私はすべての社員が【人財】と呼ばれる会社はいまだ見たことがない・・・ある意味不自然ではないだろうか。

【人財】、組織にとって貢献が期待され、発展を担ってくれる人だ。その反面、独立心が強く、向上心が高い。好奇心も旺盛なため長くひとつのところへ留まる可能性は低いのではないだろうか。
【人在】、ただそこに存在しているだけいわれている。しかし、そんな人が周りにいたらよく見て欲しいと思う。毎日の飽きてしまいそうな単純な作業を坦々とこなすのはこの手のひとではないだろうか。そして、変化を嫌い、長くその場所に残ることができる人だと考えられる。
【人罪】、組織に害を及ぼす人である。ここでは組織のなかで不正を働いたというのは例外で、組織の中に悪い影響、空気を与える人と考えたい。そんなひとの特徴として、四六時中何かに対し不満を言っている、その不満を周りに伝染させるという傾向があると思う。しかし、その不満をよく聞いてほしい。その愚痴は直接的に組織の弱点を見出していることがあるのではないだろうか。組織のリーダーはこの弱点に気づき、早く対処する必要があるのではないだろうか。
【人材】、一般的に多く使われる言葉だが、組織のなかでは私はこのタイプになりたいと考える。気持ちの前向きなときには今よりもっといい組織になる方法を考え、時にはひたすら作業に打ち込み、そして、時には自分の中の組織への不満と向き合い、体調のいい時にはその改善策を考える。お風呂の温度を調整するように、適時にいろんな自分を判断しバランスよく行動していくことが大切なのではないだろうか。
無理矢理、人を育てあげるのではなく、個人の性格、体調、モチベーションを感じ取り、適時に適材を適所に配置することができる、そんなリーダーが必要な時代ではないだろうか。

山に登る、ということ。

Satoko MAEDA 1982~
前田聡子

「いつか、ある人にこんなことを聞かれたことがあるんだ。たとえば、こんな星空や泣けてくるような夕陽を一人でみていたとするだろう。もし愛する人がいたら、その美しさやそのときの気持ちをどんなふうに伝えるかって？」「写真を撮るか、もし絵がうまかったらキャンバスに描いて見せるか、いや、やっぱり言葉で伝えたらいいのかな」「その人はこう言ったんだ。自分が変わってゆくことだって・・・。その夕陽を見て、感動して、自分が変わってゆくことだって」星野道夫「旅をする木」より引用

毎年、夏になると山に登ります。
山に登るということは自分にとって、自分を見る時間でもあります。
それは写真も同じ。写真は自分自身が映るものだと思っています。どんな写真を撮りたいか。ということは、どんな自分になりたいかということ。そして、私は山のような存在に憧れます。強く優しく厳しい存在。決して揺るがない、誠実な存在。そんな存在になりたいし、そんな写真を撮りたい。だから私は山に登るのかもしれない。

腕落ち

Tetsuya MACHIDA 1958~
町田哲也

遠い時の向こうに顎を寄せ頭骨が髪生際の皮膚を薄膜へと骨を透かして張りつめる耳の裏に歯をたてた憶えはある ー が名を忘れてしまっている女が恰も自らの股からひきずりだして放り ー 色塊を吐いた口元のカタチが細い顎喉に残され ー そして離れずに獣の一部のように蔑んでみつめる裏腹な距離を意固地に保ち向こう岸のモノよ小さな叫びを加えてから今一度自らの血肉を整えて拒絶するかの女の累々の女たちの、ー 出来れば誰もいなくなってから隠れて持ち帰って ー 赤い舌に強かに陰る淫猥な滴りの乾いた斜視瞳がそっくり男の目玉に宿り、あるいは裏側から抱いた女よりも昏い記憶か黒骸の女親から無用が移り遺ったと幾度か払ったことのある面倒に似た違和ばかり発疹のようなしきりに痒い重い瞼を、眠ろうとも瞬きもせずにぐったりとたっぷりとそのままに立つ恣意を昂らせる気配が役者のようでもある皮肉を輪郭に微動させる男の、ぽかんと項垂れて落ちた腕を眺めている姿は無表情を頼りにしていた。

散々こんなモノ見てきた。こんなものに感けるよりも歩まねばならない。呼気を淡くさせたが眼は下に落ち脈動は途切れた筈だがいまだくっきり膨れ皮膚を卑猥に巡る血液の巣穴管の膨らみを件の宿女の目玉が腕の裏側にまで届くように反復し奇異と欲望を米粒に集めるかに眉間熱く灯るばかりとなって氷の中から融けるということはあるのか肉の反転した躯に男は戸惑う。笹の葉が脹脛を浅く長く幾筋も切り裂いた傷口に腰から流れ乾いた肉塩が染み込み黒く乾いているがそこばかり酷く痒いのでやや膨れた風な陰茎をつまみだし落ちたモノのよこへ小便を細く長々と湯気を白くにおわせ垂らすと錯誤を紛らわせるよりむしろ奇怪が疼きと融け混じり半身が徐々に黒くなる変貌を男には眺め下ろすように感じるのだった。顎をやや上げると地も森も辺りの景色の深さが浅く薄い切絵の層と近づき交互に薄っぺらに重なり弱くかさかさと動くので雨でも降ってくれれば世界は一枚に張り付くと男には見える。

走りはじめて峠のような起伏を幾つも越え腰迄沢に濡らし一度墨闇の農家納屋に忍んで葉の萎れた大根を懐に掴み入れまた走り歩きもした峯の近くの岩の陰で味の抜けた塊を根から浮いた歯で砕き袋に詰め込むように腹に入れ二日経ったかと西を振り返っていたが日を繰り返した覚えはなかった。どこかに速い流れを使った回り道があってこちらを薄笑いで待ち受ける追手らが一列に並ぶ幻影はいよいよ頭瘤となり諦めを隣にみえるようにしたまま躯の肉のあの先へと都度そのことばかりを対に立て思うでもなく動いていたことを憶い起こし眉間の灯火に加えるように自らもが景色の薄紙となった侘しい心地でやや広げた落ちた腕の指を宿りの抜けた目玉で辿りそういえば夢をみる眠りもなかったと言葉がこぼれた。

あと二日走れば海にでるだろう。山々の連なりの途切れた北の隙間から垂直を切り開く紺碧を臨むと前後が淡くなりこのまま影像となる樹液と落葉で埋もれた石人を旋回する俯瞰の髪が揺れる。海をみればどうにかなると知るわけでもなかったが流離いの示しとなった幼子の示唆に満ちた波音地味た声が歩みの底や走りの首筋の喘ぎの下しきりに聞こえあれは誰の子だったか。耳を澄ませば消えたが子たちだったか。待ち伏せがあったとしたら事前に悟り別の筋を探せばいい。いかにも簡単に折れてしまう気楽を爪先で転がし高みから駆け下り突っ伏して溜まりの泥水を呑み干し立ち上がると足元に腕が転がっていた。熔けた青銅が固まるかに燃え尽きた赤い放心の心地と軀で腰を下ろし背負った袋から千切れた布を取り出し泥水に浸して絞り首から肩を拭い今度は両膝を折り座した両手で上澄みを掬おうととするとおぉと溜め息が震えて零れ腕はこの自分のものだったと気づくのだった。意味の符号の得心がこの状況景を巡ると中心の者の力根元が切断され停止する。男は風に吹かれた枯枝のごとく地に崩れ泥濘んだ土に頭顎を沈め喉に泥溜りが流れ込むと安堵の味となり少し眠ろうか。瞼が乾いた目玉をようやく覆ったが見下ろした時の訝眼の隙間はそのまま残った。

サトルと自らを名で言葉にする小さな男は子供のような背丈であったが歳は横たわる者の倍はありそうな成熟を蓄えた丸い鹿目玉を棒状に男に向け異人の風格で横に座り湯気のあがる器を差し出す動きに呼応し小さな手のひらが幾つも背を支え男の重怠い半身を起き上がらせた。目覚めてから夢をみることもある。器へ唇を尖らせどちらでもよい。熱い香りの濃い汁を短く幾度か啜り胸から腹の中への糸巡りを確かめると怯えを失くしている。まだ白く濁った割れた胡桃頭でさきほどの走りの止まった叢の足元に転がった腕が浮かんだ。

「お前を喰ってしまってもよかった。ソノがやめろといった。殺めの香りがする腕はほれみてみろ婆が繋いでみたぞ。指など動かぬかもしれぬ。フジが精汁をこしらえてくれるから喰え」

目玉を反らし小声を転がすサトルが男の腿を手で掴み立ち上がりげぇと腹から音をもどして小さな歩幅で歩み去ると背後から男の口元へ別の杓が寄せられ咽せるものを唇にあてがわれ一口飲み干してから細い干し草のようなもので縫われている動かぬ腕を見る。草叢を束ねた獣巣のようなものの中に男は居る。炉の向こうには女がふたりと子が五人黙座している。幼子三人は女で下は歩き始めの小さな体だが瞳は丸く漆黒の豆と輝く。ソノと指差された十二三を越えたあたりか女子供はモノに突き刺すような眼差しを隠さず下の二人の男子供の口を開けたままの呆けた表情を切り裂く目元は性の萌芽への憤怒を外へ見境なくあからさまに向けている。ただ子らは皆言葉を知らぬかに黙し細った白髪も見える老女の細かく動かす指先の紡ぎものに度々目が寄せられる。若い女は髄をさらして横に投げ座り俯いて暗がりに表情を隠し小さな黒い瞳の子を獣のように胸に抱くと子は指で器用に乳を探った。
子供らは長く丸く細くと特異な顔つきなので湯気の汁物を全て腹に入れ終えても横にならず男は草叢の者共と同じ目付きでみつめ血の子らでないと判る。右腕の肘上あたりが麻糸で縫われていたが痛みはなくあぁ落ちていた腕をあの指で繋げたかと白髪頭の女の指先へまた男子供を真似てみつめた。

水袋のような兎を裂いてから籠から四本の太綱の蛇骸を取り出したサトルは顎先で年上の娘の前にひとつ放り投げるとふたりは尖らせた枝の先で器用にしぃと音を立て皮を剥ぎ腹を縦に裂き同じ枝先で臓をこすり落とした。男子供のひとりは蛇皮を指に巻いて遊ぶ。兎の皮を鞣しながら俯いたままサトルはやはり小さな声を零す。

「皆盗った。俺に子種がねえかフジの子宿が壊れた。気にいらねえと愚痴るから生まれたばかりを下へ降りていくども狙ったがフジはテメエの腹を呪う貌となった。肉がないからしゃぶる」

男は自分の右腕が肩口から肘まで深々と躯にぶつかるように刃で切りつけられ裂かれ辛うじて繋がったモノをぶら下げたまま痛みなどどこかに落として走ってきたのだと白髪の女の小さな吐息を数えながら顛末を忘れるためにつむじ風地味た暴れの光景を憶いだした。フジと呼ばれた若い女は白いのっぺりとした面を光の下へ出してヨネは縫いものがうまい。花びらの唇が添い寝の夜を求めるように男に向かってつぶやいた。鉄釜に葱やら芋を煮た汁の中に丸まった蛇肉の細骨を吸うように喰う子らの尻には鼬の毛皮が敷かれサトルは蛇汁を口にせず茎のようなものをしゃぶりながら虫骸の混じり浮く白濁した酒を呑んでから男にも酒器を渡し兎を焙る。

「お前の腕は千切れたわけではなかった。ただお前は長いこと色の変わった腕を眺めて倒れていたがその訝しい瞳の黒く広がった瞼を閉じなかった。怪しんだが鼾が聴こえたので寄ってみれば腕が落ちたと寝言を漏らしていたわ。ふぉふぉ」

親指と人差し指で楊枝をつまむまでは動いたが他の指は丸く手の平の中に固まったまま黒い色をしている。男子供と皮を剥き火をおこす大蒜から岩穴の住処へ移りつつ冬を越え乳の匂いが消えるまでフジは時折近づいてその大方腐った手首を膝に置き拾ったものに投げる同じ目つきでテオチと小さく囁きながら幾度も撫でるのだった。此処でも波の音はよく聴こえる。半身の黒くなった男は耳に手のひらを重ねる。